

＜今日の説教のポイント ルカによる福音書1章39～56節＞

## 1 エリザベト訪問でマリアが確信したことは何？

マリアは天使からお腹にイエスを宿したと親戚の高齢のエリザベトも妊娠したことを告げられた後、エリザベトの所を訪れます。なぜ訪れたのでしょうか？ 天使から言われたことが本当かどうか確かめに行ったのでしょうか？ そうではありません。マリアはすでに、「神にできないことは何一つない」(37)という天使の言葉を聞いて、「お言葉通りこの身になりますように」(38)と答えて信じているのです。それは、エリザベトが「主がおっしゃったことは必ずなると信じた方は、なんと幸いなのでしょうか」(45)と語っていることから分かります。ですから、マリアがエリザベトを訪れたのはエリザベトと共に神様の恵みを受けたことを喜び合うためであり、実際そのような姿が記されているのです。この神様を信頼してやまない姿が次の「マリアの讃歌」の驚きの内容に繋がっていくのです。

## 2 マリアは自分に与えられた恵みを喜んでいただけではない。

「マリアの讃歌」を読んで意外に思うのは、マリアが神様が自分になさったことを喜ぶだけではなく、社会全体の弱者のために神様がなさる救いの業についてより多く語り、より大きく喜んでいることです。言い換えると、マリアは神様が自分に起こされたことから、神様がさらに大きな正義の業をなさることを確信し、そのことを信仰告白しているのです。前者はすでに起こったことですが、後者はまだ起こっていないことなのに、どうしてこのように思えるのでしょうか？ 何の理由もなく、そう思ったわけではありません。イスラエル人マリアの場合は、この神様が自分たちの先祖に為して下さったことを教えられてきています。そこから考えると、後者の内容まで思い至ることはおかしくないし、むしろ自分の恵みを考えるだけの方がおかしいと言えます。しかし、この出来事がイスラエル人ではない私たちとどう関係があるのでしょうか？

## 3 すべての人に広がる神様の恵み。御子イエス・キリストの到来から。

「マリアの讃歌」の最後は「その僕イスラエルを受け入れて、憐れみをお忘れになりません、わたしたちの先祖におっしゃったとおり、アブラハムとその子孫に対してとこしえに」(54-55)です。「アブラハムとその子孫」はアブラハムと同じ信仰を持つ全ての人を含みます（ガラテヤ書3章）。聖書の神様は全ての人間を造り愛されている神様であり、イエス・キリストはそのことを全ての人に示すためにこの世に来られた子なる神なのです！